

内村鑑三おぼえ書き（その九）

岩谷元輝

内村鑑三翁のロマ書注解について四たび素朴な疑問を提出して道の人の教えを乞いたいと思う。

1. 恩恵（めぐみ）の増さんために 罪のうちに止（とどま）るべきか

ロマ書第6章1節。6の15において形を変えてもう一度取上げられる。パウロの手紙の中でも特に重要な箇所の一つである。

早速翁の注解を見よう。

「罪のある所に恵みがあるならば、恵みをますます受けんためには罪の中にあるをよしとすべきではないかとの疑問である」（内村鑑三聖書注解全集第16巻209頁）

このすぐ前に

「もしおこないにより義たる能わず信仰により義とせらるというならば（略）何をしてもよい事になる。しかる時は信仰至上主義の教義は実際道徳上大なる危険をもたらすではないかとの疑問である。（略）」

という注解がある。すなわち翁は「信仰によって義とせられるなら、行いはどうでもよいことになるではないか」という疑問と、「恵みをますます受けんためには罪の中におけるをよしとすべきか」という疑問とを同じ内容のものと考えている。何か思い違いをされたらしい。ここは初めの二行だけでよかった。その中の「罪の増す所には恩恵も弥増せり」の「増す」に重点を置いて解説し

て下さるだけでよかったのだが、翁は重点はおろか、全然何も説明なしで通りすぎ、

パウロは第2節において、この疑問を一蹴し去って言う
と続けている。甚だ物足りない。

「罪に対して律法の側から加えられる非難攻撃が激しければ激しい程、赦しの恵みは豊かである」という結論を下す前に、恵みを受ける側に罪の自覚すなわち罪悪感が必要であることにパウロは（内村翁も）言及して呉れるとよかった。罪悪感が増す所に恵みも弥増すのだと一こと言って呉れば、既にそれだけでも「罪の中に止るべきか」はナンセンスとなる。そもそも「罪悪感」とは、そこから脱け出したいという気持を本来その中に含んでいる感情だからである。

恵みは罪悪感の強弱に比例して大きくも小さくもなる。罪悪感の因って来る原因は問われない。どんな兇悪犯罪も恵みを妨げはしない（弥陀の本願を妨ぐる悪なし¹⁾と親鸞も言った）。原因らしい原因が無いのに罪悪感のみ大きい場合もある。宗教的天才と言われる人々の場合がこれである。

罪悪感が強ければ必ず恵みを受けるというわけでもない。恵みは悔い改めを媒介として与えられる。否、悔い改めがすなわち恵みである。悔い改めは人の意志で為し得ることではない。恩寵として上から来るまで待たねばならぬ。死ぬまで待ってもついに来ないこともある。来ることになっている人にだけ来るのだ。所謂「予定」説の生ずる所以である。

悔い改めは罪悪感と同時に並存はしない。悔い改めが始まった時、罪悪感は消えている。罪悪感は苦悩であり悪である。悔い改めは歓喜であり善である。苦悩が深ければ深い程、その消えたあとの歓喜は大きい。「罪の増す所には恩恵も弥増せり」とパウロが言ったのは、この辺のことではなからうか。（この辺でなければどの辺か道の人の教えを乞いたい所である。）

キリスト教徒でない者が罪を云々するのは分際を知らざる者だという批判を時々聞く。罪も赦しもキリスト教だけのものという主張——植村正久氏程の人でもこれを言う²⁾——は、異教世界についての無知の表白に過ぎない。仏教で

は「罪」よりも「悪」の方が頻繁に用いられるようだが、この両者の関係について金子大栄氏は「悪が我々に責任を感じしむる時、特に罪と呼ぶ」と説く³⁾。キリスト教徒なら「神に対して」責任を感じると言わないと承知しないところか。「恵みの増さんために罪のうちに止るべきか」というパウロの言葉について施したカルヴィンの注の中の「医療はそれが絶滅する所の病を助長するものではない」云々⁴⁾という言葉は、親鸞の「薬あればとて毒を好むべからず」⁵⁾という言葉と符節を合わせるように似ている。恵みの増さんために云々という問いは親鸞の耳にも屢々届いたらしく「ふるまひはなにともこころにまかせよといひつるとさふらふらん、あさましきことにさふらふ」と手紙の中で歎いている⁶⁾。又、罪と恵との関係は浄土門のみの関心事ではなくて、例えば「有二比丘犯淫殺。波離螢光増罪結。維摩大士頓除疑。猶如赫日鎖霜雪」⁷⁾というあの聖語に見られる如く、聖道門においても大きな課題であるかの如くである。

いずれにしても、「恵の増さんために罪のうちに止るべきか」を注釈するなら、「増す」という言葉について何らかの説明が欲しかった。そうすれば「然らず」についての注釈は、それこそ素通りしても差支えなかったのだ。

「パウロは第2節において、この疑問を一蹴し去って言う『然らず、われら、罪において死にしものなるに、いかでその中において生きんや』と。われらすでに悔い改めて赦罪の恵みに浴せし者、罪において死にし過去の惨状は想起するだに恐ろしきものである。しかるに今に至って恵みの増さんために再び罪の中に死の生活を続けんとするとき、とうてい思い得ぬことであるとパウロはいう。(略)この一語は愚かなる疑問を一蹴し去るには十分である」(210頁)(傍点岩谷)

「果して十分か」と問う前に、「果してパウロはこんなことを言ったのか」と問うことから始める。

内村翁が「われら既に悔い改めて、赦罪の恵みに浴せし者」を「罪において死にし惨状」と対照させている所を見れば、「罪において死にし」を「未だ悔い改めざりし」の意味に解していると判断してまず間違いないであろう。更にそのあと「再び罪の中に死の生活を続けんとする如き」と続くのを見ても、翁の「罪において死にし」は「罪の中に死の生活をなせし」の意味であることは確実である。だが、パウロはそんなことを言ったのではない。パウロの「罪について死にたる我ら」は「罪の生活をやめた私たち」の意味である。内村翁は

「罪に死にし過去の惨状」と言うが、パウロは「罪に死なざりし過去の惨状」と言っているのだ。パウロの「罪につきて死にたる我ら」を内村翁は「罪の中で惨澹たる生活が続けしものなるに」と解しているが、パウロの言わんとするのはその正反対であって、「あの恐ろしい罪から救い出されしものなるに」ということである。内村翁は「死にし」を「死にてありし」の意味にとった。カトリックの聖者の言った「死んでいるような生命、あるいは生きているような死」⁹⁾の中にありし、という意味にとった。だがパウロは、「そのような死から救われてありし」の意味で用いている。そう解釈しないと内容が次へつながつていかない⁹⁾。試みに英訳聖書が「罪につきて死にし」の部分をもどのように訳しているかを調べてみると、

A.V.: How shall we, that *are dead* to sin, live any longer therein?

R.S.V.: How can we who *died* to sin still live in it?

S. & G.: When we *have died* to sin, how can we live in it any longer?

G.N.: We *have died* to sin—how can we.....

O. & C.: We *died* to sin: how can we.....

J.B.: We *are dead* to sin, so how can we.....¹⁰⁾

現在完了形を用いたもの2, 現在形2, 過去形2という結果が出た。現在完了形も現在形も、共に、「現在死んでいる」という意味である。すなわち「現在罪から救い出されている」という意味であって、内村翁の解釈とは正反対である。過去形 *died* も内村翁の解釈とは一致しない。翁の解釈を英語になおせば *were dead* という形になるであろう。(翁は前置詞 *to* も *in* と読み違えたらしい。)

英文聖書がこのように訳しているから、それとは違う内村翁の解釈は誤りだ、というのではない。パウロの説法を玩味しながら熟読すると、どうしても翁の解釈と反対の解釈をとらざるを得ないのである。翁はロマ書を熟読玩味しなかったのだろうか。内村翁の聖書注解を精緻無比と讃えた亀井勝一郎氏¹¹⁾は、翁のこの誤注を何と説明するだろう。

内村翁が「罪について(対して)死にたる」を誤り解したということは、単なる語句の読み誤りとして見のがすわけにはいかぬ事柄のように思われる。言い間違いは無意識の世界を探る手がかりであることをフロイトによって教えられ

た我々だが、解し間違えが意識の世界を探る手がかりであることぐらいは、フロイトを待たずとも知っている。ここは「うっかり間違えた」という弁解は通らぬところだ。パウロの説法の中でもサワリともいうべき肝腎なところである。ここを間違えると、キリスト教全般の理解度さえ疑われ兼ねない。こんな大事なところを内村翁は一体何故間違えたのだらう。ここを間違えたら次の節の説明に支障を来すことに何故気がつかなかったのか。(次の数節を順に吟味したあとで、もう一度ここへ戻って来る。)

「汝ら知らぬか。凡そキリスト・イエスに合ふバプテスマを受けたる我らは、その死に合ふバプテスマを受けしを」(6の3)

キリスト・イエスに「合う」とはどういうことだらう。口語訳は「あずかる」としている。英訳は殆ど皆 *baptized into Jesus Christ* としている。試みに漢訳聖書を見ると、豈不知我們這受洗歸入基督耶蘇的人是受洗歸入他的死麼、とある。イエス・キリストに「歸入する」という言葉を中国の人は考え出した。「合う」や「あずかる」ではよくわからないが「歸入する」なら何となくわかる。ルターの独乙語聖書は *die sind in seinen Tod getauft* としており、バルトのロマ書講義¹²⁾の和訳者はこれを「死にあるバプテスマ」と訳している。果して正解か。訳者はわかって訳しているか。「死にあるバプテスマ」「死に合ふバプテスマ」「死にあずかるバプテスマ」いずれも前置詞句をバプテスマにかかる形容詞用法であるかのように訳しているが、バプテスマという名詞は原文に無いのだから、この前置詞句は副詞用法であること紛れもない。*baptized* にかかる副詞として訳するのが正しいであらう。(ガラテヤ書3の27のほぼ同じ文句を大正訳は副詞として訳している。)それはとにかくとして、「汝ら知らぬか」とパウロが言っている所を見ると、ロマの信者の中には、何が何やらわからずに洗礼を受けた者もいたのか。洗礼を授けた長老は何故洗礼の意味を前もって信者に教えておかなかったのだらう。パウロも、「汝ら知らぬか」などと無知な信者を咎めるよりも、洗礼責任者の長老の方を責めるべきではなかつ

たか、というのが、ロマ書を読み始めて以来長い間の私の疑問だったが、試みに G.N. 聖書を見ると For surely you know this: としている。Jerusalem Bible は You have been taught that としている。ロマの信者に洗礼を授けた長老たちが怠りなく信者に洗礼の謂われを教えたことにして訳している。眼のさめるような新訳である。新訳というものは斯くありたい。日本語聖書の新訳のように「汝ら知らぬか」を「あなたがたは知らないのか」とやるぐらいなら子供でもできる。「知らないのか」と手紙に書く奴があるものか。日本の聖者親鸞の手紙でも日蓮の手紙でも読んでみるがいい。どんなに鄭重な言葉で弟子たちに呼びかけていることか。「知らぬか」という無礼な変な言い方を訝る所から新しい訳を企てるのでなければ新訳の意味は薄いであろう。ちなみにルターの独乙訳を見ると古い英訳と同様 Oder wisset ihr nicht daß..... ...としている。ルターも変だと思わなかったのか。ギリシャ語原典がそうならいけばやむを得ないのか。とすると G.N. 聖書や Jerusalem 聖書は原典を書き変えたことになるのか。書き変えてもいいのか。聖書研究の興味津々として尽きざる所である。フェデリコ・バルバロなる人の注解の和訳¹³⁾を見ると「『あなたたちは知らないのか』とパウロは言ふがそれは相手が洗礼の意味をよく知っているを前提しての言ひ方である」としているが、果してどんなものだろう。たしかに、足があることを前提として「足が無いのか」ときいたり、大人であることを前提として「君は子供か」ときいたり、その他これに類するきき方は有る。だが、6の3の場合の「汝ら知らぬか」は、それとも違うようだ。

「これキリスト父の栄光によりて死人の中より甦へらせ給ひしごとく、我らも新しき生命(いのち)に歩まんためなり」(6の4)

「歩まんためなり」とは「これから歩む」「まだ歩み始めている」という意味を含むのか。それとも葬られると同時に歩み始めているのか。「葬られる」ことが完了したのなら、もう歩み始めていると考えるのが論理の必然である。「葬る」という言葉の内容から必然的に出て来る結論である。歩み始めている

いのなら、葬られてもいないのだ。葬られた形をとっただけだ。葬られたことにしただけだ。それなら、そのことをはっきり言わないと、あとの話が混乱して来る。これから先ロマ書の到る所に現われる混乱（と私には見えるもの）の原因は、ここにあるのである。

洗礼を受けた人は本当に新しい人に生れ変わったのか。それとも生れ変わったことにしておくのか。本当に生れ変わったのならパウロの説教はクド過ぎる。生れ変わった人なら言われなくても知っている筈のことをクドクド言い過ぎる。生れ変っていないのなら、その人を生れ変わったことにして、「君は生れ変わった、生れ変わった」と反復説教するのは催眠術師の手法に似ている。

「我らもしキリストと共に死にしなければ、また彼と共に生きんことを信ず」
(6の8)

「死にしなければ」？ もう死んでいる筈ではないか。「彼と共に死にたれば、彼と共に生きてあり」と言わなければ話の首尾は一貫しないではないかと思いつつ又英訳を調べてみると、殆どが *If* を用いて和訳と同様である中に、我が *Jerusalem Bible* だけが *having died* として、ここでも全く独自の見解を打ち立てている。この訳者の自信と勇氣は高く評価されねばなるまい。フランス語訳から英訳したものだということから、真に賞讃すべきはフランスの訳者の方か、と思ってフランス語の *La Bible de Jérusalem* を調べてみると、

Mais si nous sommes morts avec le Christ, nous croyons que nous vivons aussi avec lui,

云々とある。やはり英訳だけが独自の見解を出しているのだ。定説を無視しても教えの真髓に迫ろうとする気迫、見事というほかはない。この *having died* という分詞構文は *as* よりも *if* に近いのだという意見も考慮に値するとしても、それでも *if* を捨てて *having* を採ったのは前進である。主節の方に定説通り未来時を用いているのでは、変りばえがしない——と、そこまで言うのは言いすぎであろう。原典書き変えの一步手前で踏みとどまったことも又高

く評価されているのである。

「斯くの如く汝らも、己を罪につきては死にたるもの、神につきては活きたるものと思ふべし」(6の11)

「思ふべし」は可笑しいではないか。「活きたるものなり」と何故言わぬか。それとも生きていないのか。生きていない者が「思ふべし」と言われて「ハイ 思います」と答えられるか。「親は無いものと思ふべし」「金は無いものと思ふべし」の如き類の「思ふべし」なら「ハイ 思います」も可能だが、「罪につきては死にたるものと思ふべし」という命令は、オイソレと従うことのできる性質のものではなからう。「罪につきて死ぬ」ということの意味がまずわかっていなくてはならない。だが、それがわかっている人に「思ふべし」と命ずるのも可笑しなものではなからうか。わかっているが思わなかった信者がいたのか。思わなくても信者になれたのか。口語訳は「認むべきである」としている。英訳は何と言っているだろうと調べてみると、命令形にしているのは A.V. だけで、あとは皆 You are to think 又は You must think になっている。「思ふべし」ではなくて「思わねばならぬ」である。命令したのではなくて原理を説いたのだ。となると可笑しさは大幅に減少する。ほんのちょっとした訳語の加減でパウロの言葉のニュアンスは大きく変る。聖書翻訳の仕事の恐ろしさ。

さて、この辺で6の1へ戻ろう。

「汝ら知らぬか」が実は「汝らの知れる通り」であり、「思ふべし」が「思わねばならぬ」であるということになると、6の1の「罪のうちに止るべきか」も自ら異った陰影を帯びて来る。この問いは果して信者が発したのか否かも疑ってみる必要があるかも知れない。パウロは3の8において「また『善を来らせん為に悪をなすはよからずや』(或者われらを譏りて之を我らの言なりと言ふ)」と言っている。「罪のうちに止るべきか」も、パウロの説法を誤解曲解した者どもがパウロに浴びせた問いを、そのまま採り上げて、信者へ語りかける手段として利用したのかも知れない。内村翁はこの問いをパウロが仮想したものと

しているが、大いに疑問である。このあと「汝ら知らぬか」と続くなら、私のこの解釈は成立たない。この問いは信者の発したものと見るほかない。だが、「汝らの知れる如く」と続くなら成立つ。成立つどころかこのように考えるほか無いように思われる。なぜなら「汝らの知っているように」以下のことを本当に信者が知っているなら、「罪の中に止るべきか」などという問いは発するまでもないからだ。「汝らの知れる如く」が今日の聖書学者の間でどの程度に迎えられているのか詳にしないが、例えばバルトはこれを認めず、「汝ら知らぬか」を踏まえて議論を展開している。「汝ら知らぬか」が正しいとなるとロマの信者たちはキリスト教の真髄を知らなかったという事になる。(「否、ならない」というのが先に挙げたバルバロの注解である。)

ところで内村翁は、以上を注解して言う、

「キリストとクリスチャンの霊的合致はここに示されている。すでにバプテスマを受けてキリストと共に死し、共によみがえりしという実験あらば、彼が罪について死せしごとく、われらも罪について死せる者、彼が神について今生けるごとく、われらも神について生ける者であるべき筈である。われらはすでに罪とサタンに仕える生涯を捨てて義と神に仕える生涯に入ったものである。しかり、たしかにそうである。しかしながらこの一義を人は往々にして忘れんとする。」(212頁)

「罪について死せし」の受け取り方は今度は間違えなかった。ここで間違えなかったということは6の2の注解でも間違えなかったことの証拠にはならない。ここで間違えなかったとはいっても、実は聖書の文句をそのまま写しているだけだ。写しながら「オヤ変だぞ、さっきと違うぞ」と思わなかったらしいことの方がむしろ異様である。だが、それより興味深いのは「人は往々にして忘れんとする」という一行だ。

そもそも自分が「罪に死」んだことを忘れる者が世の中にいるだろうか。「罪に死」ぬとは、旧き人と新しき人の交代が行なわれることであって、個人の生涯を前半と後半に二分する大事件の筈である。禅家に所謂「百尺竿頭一步を進める」或いは「懸崖に指頭を放って絶後に甦る」などとも相通じて、大死一番生還を期せざる大事業の筈である。それを忘れるとは!

たしかに信者の中には、「罪に死」んだ者らしからぬ振舞に及んだ者が多か

ったであろうことはパウロの手紙の内容から推察されるが¹⁴⁾その者どもは「罪に死」んだことを忘れたのではなくて、「罪に死」んだことがなかったのだと見るべきであろう。「罪に死」ぬとは何のことかわからぬままに信者の仲間に入れられてしまった。わからなくても信者になれたのである。(とすると、クリスチャンとは結局何だ。) パウロが「汝ら知らぬか」と呆れたように、怒ったように言ったのは、やはり信者たちが肝腎なことを知らないので驚き歎いたのかも知れない。どっちがどうなのやらわからなくなって来るが、いずれにしても、「忘れる」はおかしい。内村翁が「忘れる」という言葉をここに用いたのは、翁自身も、「罪に死」ぬということの意味を正しく把んでいなかったしるしかも知れぬとさえ疑われる。把んでいれば、如何に何でも「忘れる」などという語は使えぬ筈だ。忘れ得る性質のことではない。把んでいなかったからこそ翁は「信じさえすれば」「十字架を仰ぎさえすれば」などと「さえ」を連発して、信ずることの易しさを強調力説することができたのではなからうか。「信じさえすれば」は「罪に死にさえすれば」と同義であり、罪に死ぬとは、文字通り死んでしまう程の決意が必要であることを知っていたら、「さえ」という言葉を使うことに、今少し「ためらい」があったであろう。ためらいが無いということは時として思想の浅さのしるしであることがある。増谷文雄氏は、「宗教とは何か」を説き起すに当り、シュライエルマッヘルの躊躇いに倣って、「まず躊躇をもって始めたい」と言われた¹⁵⁾。内村翁の躊躇らわぬ明快さを思想の浅さのしるしと断定することには、当の増谷氏自身が高く評価している内村翁のことだけに私も大いに躊躇するが、或いは?という疑いが胸をかすめることは如何ともし難いのである。

2. 律法の下にあらず、恩恵の下にあるが故に、 罪を犯すべきか。

6の15である。6の1とよく似ている所から、比較対照されることが多い。内村翁も比較している。小さな点は省略して、いきなり翁の注釈の要点に入

る。

「罪の生活を捨てて義の生活に入ったのではあるが、しかし、一つや二つの罪を犯してもよいではないかとの疑問である。」(216頁)

果してそういう疑問か。百も二百も罪を犯してはいけないが、一つや二つなら、まァいいじゃないかと言っているのか。

『われら恵みの下にありて律法の下にあらざるがゆえに』とある。すでに義とせられて、今やわれら全く恩恵の下にある。今ははや律法はわれらを縛らない。われらは律法の支配を受けてはいない。神は今や恩恵の中にわれらを置きたもう。その愛はわれらを取り囲んでいる。ゆえに少しぐらゐは罪を犯してもよいではないか。神がゆるす神である以上、われらは罪を犯すもゆるさるる筈である……」(216頁)

これは、愚かなる(と翁が見た)質問者になり代って、質問の主旨を解説したものであるから、これを批判することは直接翁を批判することにはならない。翁自身もこれを批判し叩き潰そうとしている。だが、これが質問の主旨から離れていたら、主旨を把みそこねたという点で翁は批判を免れないであろう。果して質問の主旨は的確に把握されているか。質問者は「罪を犯してもいいではないか」と言っているのか。英訳を見よう。

Shall we sin..... (A.V.; G.N.)

Are we to sin..... (R.S.V.; S. and G.; O. and C.)

Does the fact that we are living by grace and not by law mean that we are free to sin? (Jerusalem B.)

「罪を犯してもいいではないか」と訳しているものは一つも無い。特に Jerusalem Bible は「罪を犯すも勝手次第ということになるか」と今度も胸のすくような訳をつけている。この問いの主旨はそういうことであろう。

そもそも「犯してもいいではないか」は問いではなくて主張である。「犯してもいいのではないか」なら問いだ。「の」の有る無しで内容がガラリと違って来る。だが、「いいのではないか」も「いいのか」と比べると、同じく問いではあっても大分趣きが異なる。「いいのではないか」は、「いいと思うがどうだろう」というのだが、「いいのか」は「いけないと思うがどうだろう」というに近い。危ぶむ気持がまじる。語気次第では詰問の調子にもなる。そして、

「いいのか」と「いいか」も又違う。パウロの敵は多分「いいのか」ときいた。パウロの弟子は多分「いいか」ときいた。そしてパウロは、この両方を受け止めて「いいだろうか」と問題提起をしたのであろうと推測することができそうである。この三つを並べてみる時私は、一種厳かな緊迫を感じるのだが、これに比べて内村翁の「犯してもいいではないか」は、パウロ自身からは固より、パウロの敵からも弟子たちからも出て来ようのない凡そ場違いのセリフであって、パウロの本旨から大きく逸脱したのみならず、「神はゆるす神なれば」云々という、甚だ粗雑な解説をつけることによって、翁はその逸脱を決定的なものにしてしまった。

「われら少しは罪を犯すもゆるさるる筈である」という翁の判断は、前後の文脈から切離して取上げる時は正しい。少しでなく沢山の罪を犯すもゆるさるる筈である。だが、内村翁は、ここで「ゆるす」という言葉を「してもいいと認める」という意味に用いている。「罪を犯してもいいではないか……許さるる筈である」というふうに続いているのだから、どうしてもそう解釈される。そして、その意味なら実に途方もない誤りであって、神は人が罪を犯すのを決して許しはしないのである。

神は罪を犯した人を赦す。その罪がどのように極悪非道なものであっても赦す。しかし神は人が罪を犯すのを許さない。その罪がどのように小さなものであっても許さない。日本語の「ゆるす」という動詞には、大ざっぱに分けて三つの意味がある。①罪を赦す。赦免する。②自由にさせる。③さしつかえないと認める、の三つである(広辞苑参照)。英語になおすと①は *forgive* ②は *allow* ③は *approve* か。上の場合に当てはめるなら、「神は罪を犯した人をゆるす」という時の「ゆるす」は *forgive* であり、「罪を犯すのをゆるさない」という時の「ゆるす」は *approve* であろう。内村翁は、6の15を解説するに当って、この *forgive* と *approve* とを混同している。翁が混同したのではなくて、翁に批判されている質問者が混同したのだというか。それは違う。質問者は混同しなかったのだが、翁が混同させたのである。翁が質問者を、ことさらそのように程度の低い人間として我々の前に示したのである。ロマ書第6章

には、このような混同は痕跡もないことは、注意深い読者なら何びとも認めるであろう。否、注意深くない読者でもわかる。「罪を犯すべきか」を「犯してもいいではないか」に置き換えた翁の作為の奇怪さ。しかも翁はこのような、神の恵み、神の赦しの意味を全然理解しない人をクリスチャンとして認めている。いよいよ以って奇怪至極である。クリスチャンとは結局何なのだ。(認めている証拠は「すでに義とせられて今や全く恩恵の下にある」という一行で十分だ。)

翁の認めたクリスチャンたちと、パウロが「我ら」と呼ぶクリスチャンたちとは全く別ものである。翁のクリスチャンたちは「罪を犯してもいいではないか」という卑しい主張をする者共であるが、パウロのクリスチャンたちは、その中にパウロ自身も含まれていて¹⁶⁾「罪を犯してもいいだろうか」と半ば自分自身に問いかけている。原理を追求しているのである。翁のクリスチャンたちは、翁によって叩き潰されるのを待っている馬鹿者共の集団だが、パウロのクリスチャンたちは、その中にパウロが入っているのだから、翁といえども叩き潰すことなど思いもよらない。

私は何を言おうとするのか。

翁は或ことを主張しようとする時、極度に幼稚な主張を自己の主張と対立させ、それを叩き潰すことによって自己の主張の正当性を誇る傾向があることは、これまで見て来た通りだが、その癖が又してもここに現われたのではないか¹⁷⁾。ここで翁は自ら造ったクリスチャンの幻影集団を叩き潰して快としているようだが、それがパウロの説教とは噛み合う所のない空しい独りよがり過ぎないことに気がついていない。翁がここで答えるべきはパウロその人を含んだクリスチャン集団が提起した大きな問いだったのである。

(1949年9月)

[注]

- 1) 歎異抄
- 2) 植村正久説教集「十字架の一側面」その他随所
- 3) 金子大栄：教行信証講読，教行の巻 232 頁（金子大栄全集第 6 卷）
- 4) カルヴァン：新訳聖書注解Ⅶ ロマ書邦訳 152 頁

- 5) 歎異抄 (下)
- 6) 末燈抄 (親鸞書簡集)
- 7) 便吟証道歌
- 8) アウグスチヌス：告白第1巻第6章
- 9) ロマ書6章10, 11節
- 10) A.V.=Authorized Version
R.S.V.=Revised Standard Version
S. and G.=Smith and Godspeed
G.N.=Good News for Modern Man
O. and C.=Oxford and Cambridge Bible
J.B.=Jerusalem Bible
- 11) 内村鑑三おぼえ書き (その2)
- 12) カール・バルト：ロマ書講義 (小川・岩波訳)
- 13) バルバロ：ローマ人への手紙注解邦訳 315頁
- 14) コリント前書5章1節その他
- 15) 増谷文雄：宗教概論第1章
- 16) ロマ書6章1節の「われら」という複数一人称の重要性
- 17) 内村鑑三おぼえ書き (その7) その他